

平成 25 年 12 月 27 日

医療法人社団洛和会 洛和会音羽病院

## 1. 施設の概要

所在地：京都府京都市山科区音羽珍事町 2

病床数：608 床

一般病床：428 床

（うち ICU/CCU:12 床、救急救命病棟:28 床、SCU6 床、NICU3 床）

緩和ケア病棟：20 床

医療療養型病棟：50 床

回復期リハビリテーション病棟：50 床

認知症治療病棟：60 床

病院HP：<http://www.rakuwa.or.jp/otowa/>



## 2. 地域及び施設の特徴

洛和会音羽病院が属する京都・乙訓医療圏は、京都府の東部に位置し 3 市（京都市、向日市、長岡京市）、1 町（大山崎町）で構成されている。当該医療圏の人口は約 163 万人で京都府の 2 次医療圏の中で最も人口が多いものとなっている。

洛和会音羽病院は救急医療に関し「24 時間 365 日救急患者 100%受け入れ」を信念とした ER 型救急を実践しており、平成 24 年度には年間約 5,800 件の受け入れを行っている。また、地域医療機関との連携を密に行っており、紹介率 40%以上、逆紹介率は 60%以上となっている。

## 3. 事業計画及び資金計画

### （1）事業計画

平成 21 年に機構の融資により実施した洛和会音羽病院の内部改修計画は次のとおり。

- ① 法人内の別病院へ病床を分割したことに伴い空いたスペースを活用して、1 床あたり 8 m<sup>2</sup>を確保し療養環境の改善を図り、がん患者等の更なる受け入れを目的とした。
- ② ER 内に病床を新設し急性期重症患者に対応することを目的とした。

これらの整備を図ることによって地域医療支援病院ならびに地域がん診療連携拠点病院

を目標としており、現在もその目標に向けて取り組んでいる。

## (2) 資金計画

建築資金（設計監理料含む）	528,021 千円
機構借入金	473,000 千円
改修面積	5,923.93 m <sup>2</sup>

### 4. 施設整備におけるポイント

#### ①療養環境の改善

療養環境加算を取得するため、1床あたりの面積を6.4 m<sup>2</sup>から8 m<sup>2</sup>に改修した。その際にはただ広くすればいいというものではなく、家具の配置等により患者様同士が顔を合わせずに済むよう配慮したことや看護師が作業しやすいような作りにも配慮した。

例えば、看護師から病床内のボタンや手すりの位置等について意見を出してもらい、改修時にその意見を反映させたりした。



療養環境が改善された広くなった4床室

#### ②個室病床を増加

個室病床を増やし、患者様のプライバシーに配慮した。個室病床の利用を希望する患者様も多く、個室病床の稼働率が高い。しかし、脳卒中を患った患者様の場合は、あえて多床室に入っただき、耳から入る情報による刺激を脳に与えることで脳機能のリハビリの一助になるよう工夫をしている。

#### ③スタッフステーションのオープン化

スタッフステーションをオープンカウンターにし、開放感のあるスタッフステーションにすることで患者様もスタッフとのコミュニケーションがとりやすくなったと評判であり、スタッフの満足度も向上している。

また、休憩室を広くしたほか、スタッフからの意見を反映させ、休憩室はスタッフステーションから遠くせず近くに設置することで常に患者様に気を配れる態勢を整えることができた。



患者様とスタッフの心理的距離を縮めたオープンカウンター

## 5. 施設整備による病院機能の向上

救急医療やがん医療等の重症患者へ特化した診療を実現するため、外来患者を1,000人/日から900人/日に意図的に減らし、風邪等軽度な症状の患者や糖尿病患者を診療所に紹介する逆紹介率を向上させた。このような取り組みにより、従来から力を入れている病診連携に深みが増した。現在は、病診連携に介護を加えた病診介護の連携を目指している。これも、改修による施設整備の具体的効果の一面と考えられる。また、診療所との信頼の構築により重症度の高い患者を多く集めることができている。

実際に逆紹介により外来患者数は減ったが、外来患者の重症度や診療所からの紹介患者の重症度が上がっている。

また、スタッフからの意見を求めそれを改修計画に反映させたことで、スタッフ自身が自分たちで作った病院という意識が高まり、就労に関する満足度が上がったことや離職率が低下する等の効果も現れた。

そのほか、診察室の入口に担当医師の顔写真を張り出し、医師に対する親近感と安心感を患者様に与える工夫をしている。

## 6. 今後の課題

昨今の医療技術の向上により、手術の種類によっては患者様の身体的負担がかなり軽減されているものも出てきた。例えば、白内障手術は、入院が必要なケースが主であったが、最近では日帰り手術も可能となっている。将来的には白内障手術は入院ではなく外来にシフトし同手術全体に占める日帰りの比率が50%以上になるよう目指したい。

こういった日帰り手術へのシフトが可能な要因は、短時間で手術が出来るようになり患者様の負担が減ったこともあるが、訪問看護サービスにより患者様へのアフターフォローが可能となっている側面もある。

今後は、国内だけではなく中国や韓国等近隣諸国との連携により画像診断センター等を国外に設置し、医療の分業化を図る構想もある。しかし、現状は放射線技師不足や画像診断の技量の精度等の問題もあるため実現までには時間を要する。

以上